

地域活性化という「遊び」

27

京都市
福知山市 「みわ・ダツシュ村」から

山本晋也

朝 一番
お母さんが

お味噌汁を作っている間に
ぬか床からお漬物を出し
ぬか床をかき混ぜて

また野菜を漬けるという風景は
田舎でも珍しくなってきました。
我が家でも忙しいと
ついついかき混ぜるのを忘れて



長男のぬか床。
塩などにも色々こだわりがあるそうです。

ぬか床の状態を悪くしてしまい
漬物が何日も途切れてしまうことも
しばしばです。
しかし

最近長男が自分のぬか床を持ち
毎日せっせとかき混ぜては
美味しい漬物が朝の食卓に
出てくるようになりました。
別に忙しいからと
子供に頼んだわけでもないのですが
実に楽しそうに

ぬか床の世話をしています。
そしてこれがすごく美味しい。
あまり大きな声では言えませんが
お母さんのより
美味しいかも？しれません。
「漬物くらい毎日用意してよ」
というのがよく

楽しみなながら物を作る子供から
元子供だった大人が学ぶこと

夫婦喧嘩の種にもなるのですが
忙しい世の中で子供4人育てながら
毎日ぬか床の世話をするというのは
なかなか大変なことです。
大人は毎日の繰り返しになるとつい
「めんどくさいなー」と思っています。

しかしやらなきゃ
旦那や子供がうるさいし
スーパーで買うと高いから
我が家のお母さんは
「仕方ない、まあ漬けていてやるか」
となるわけです。

長男自身が食べたいからか
漬物をきっかけに
朝から始まる犬も食わない夫婦喧嘩
を食いたくないからか
ちよつと真意はわかりませんが

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダツシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人々が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダツシュ村副村長。

突如として始めた長男は
毎日ぬか床の水分や匂い
漬け上がった漬物の味を比べては
塩を足したりぬかを足したり
毎日楽しそうに続けています。

加えて

ぬか床に入れる野菜も
自分で作りたくなったらしく
自分の畑を作って
大根やラディッシュの種を蒔き
きゅうりやオクラの苗を
育て始めました。
夏の暑い時など
大人たちがやっている畑を手伝って
もらうと
いやそうに作業することもありまし
たが
自分で始めた畑はせっせと楽しそう
にやっています。
労せずして夏には美味しいきゅうり
の漬物が食べられると思うと
とても嬉しいのですが

ハウス（我が家）で
せっせと苗作り。



畑で使う資材も自分たちで調達。



お菓子も食べたくなったら
自分から作り始めます。

小さかった頃、
蛇を遊び道具にしていましたが
今でもまだ楽しそうにやっています。



誰に言われたわけでもなく
自ら物事を始め
それを毎日楽しそうに続けている子
供の姿を見るのは何より嬉しいこと
です。

イ ギリスの美術評論家
ジョンラスキンの言葉に
「楽しんで作ったものは美しく
イ

ヤイヤながらに作ったものは美しく
ない」
というのがありますが
お母さん顔負けの美味しい漬物を
子供たちが
いとも簡単に作ってしまう理由は
案外そんなところにあるのかもしれ
ません。

「自分から始める」ということと
「人にやらされる」ということでは
全く同じ作業でも
そこには大きな違いが生まれます。
そんなこと子供にしかできないよと
大人たちは言いますが
そんな大人も元をたたせば
立派な子供だったわけですから
そういう素晴らしい感性は
大人になった今も
どこかに必ず残っているはずで
ただ色々経験するうちに
物の見方が出来上がってしまっ
てそういう出発点を忘れてしまっ
ただけなのです。

「大人は子供より知っている」
という視点をちよっと置いておいて
子供をよよく観察してみましょう。
子供は自ら元気を出します。
大人が子供に学び
自分で自分の元気を
取りもどすことから
本場の地域活性化は
始まると思っています。